

母屋の灯りは消えていた。家の周りには朝は蕾だった彼岸花が今は一面に咲き誇っている。月影を碧く落とす様は静謐と無常、そして幻だけを透過しているように見えた。

鍵を回し引き戸を静かに開ける。佐伯はわざと時間をかけて靴を脱ぎ、滲んでくる涙を手の甲で拭いた。「おかえり」という朗らかな声が聴こえない。ぱたぱたと駆けてくるスリッパの音が聴こえない。電気の点いていない母屋の廊下はこんなにも薄ら寒かっただろうか？ 居間に差し込む月の光は、こんなにも冷えびえとしていただろうか？

縁側に腰を下ろし背中に座布団を入れ、浴衣姿の航は月を眺めながらゆっくりと呼吸していた。佐伯に気付いて首を廻らし力ない微笑みを浮かべて手を伸ばした。縁側は濃紅色こいくれなに染まっていた。去年までそこに咲くことのなかった曼珠沙華が、今は不気味な花卉を一齐に広げているのだった。

佐伯は咄嗟に縁側へ下りて曼珠沙華を踏み潰した。死人花、地獄花、幽霊花。花言葉は転生、諦め、そして再会。

「迎えに来たのかよ！ ほっといてくれよ！」

佐伯は声を限りに叫びながら、ついに感情を顕わにした自分に安堵した。彼岸の航と、此岸の俺。その間には途方もない時間が流れ、真つ黒なそれは川となり岸と岸の間をどろどろと埋めていく。川べりには無数の彼岸花が咲き誇り、並行世界を知らない死に損ないの俺を嘲笑うのだ。

「可哀想だよ……」

航がそう呟いた瞬間、佐伯は我に返った。暴力的に花を踏み散らし筆り取ったあとを見下ろして呆然とする。はあはあと呼吸を貪りながら額から滴る汗を袖で拭いた。朱い花卉が無数に散らばり、心地よい小夜風にふうわりと揺れる。

「来て……」

航が呼ぶ。佐伯は航の横へ腰を下ろし、そっと抱いた。夜風の匂いに交じり薬品と冷蔵庫の匂いがする。それは法医学教室のあの何とも言えない消毒薬の匂いだった。死体の臭い。佐伯は嗚咽を堪え切れずに号泣した。航は佐伯の指先が肋骨の間に入るほど痩せてしまった。消えてしまう。もう、航は行ってしまった。

「写真を撮ってみよう」

呼吸が上がり返事が出来ない。

「たどえ俺が消えてしまっても、もしかしたら写真には残るかもしれない」

「そうだ・・・チエキが・・・あるから・・・」

声にならない。

「鑑識時代に・・・冗談でみんなを買って・・・」

「チエキなんて持っているの？」

航がふふと笑った。

「持ってきて・・・」